
Fate5D's

天道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e 5 D · s

【Nコード】

N 9 6 4 7 X

【作者名】

天道

【あらすじ】

遊星はゾーンとの戦いの後にアーククレイドルの崩壊に巻き込まれて異次元に飛ばされた。

そして、異世界の聖杯戦争のサーヴァント召喚の儀式を行った遠坂凜の声に心えて英霊として召喚され、凜と共に聖杯戦争に参加する。遊星に待ち受ける新たな運命の戦い、魔術師同士の殺し合いに生き残れるのか！？

設定（ネタバレあり）（前書き）

遊星の設定です。

若干ネタバレが含まれているので注意です。

設定（ネタバレあり）

クラス：デュエリスト（決闘者）

マスター：遠坂凜

真名：不動遊星

性別：男性

属性：秩序・善

イメージカラー：赤

特技：ハッキング、プログラム作成

好きなもの：メカいじり、D・ホイール

嫌いなもの：仲間を傷つける者、クズ・ゴミ呼ばわり

天敵：無し

筋力：D

耐久：B

敏捷：C

魔力：E

幸運：A+++

宝具：EX

ゾーンとの戦いの後にアーククレイドルの崩壊に巻き込まれて異次元に飛ばされた。

異世界の聖杯戦争のサーヴァント召喚の儀式を行った遠坂凩の声に応えて英雄として召喚され、強制的に凩のサーヴァントとなってしまう。

聖杯戦争で本来なら全サーヴァントの中で最弱の存在であるが、遊星は全てのサーヴァントと比べても劣らない強力な能力を持っている。

クラス別能力

対魔力：A

神の化身『赤き竜』の加護によって遊星に対するA以下の魔術は全てキャンセル。

ただし、遊星が宝具で召喚した魔物には魔術が通用する。

単独行動：A

遊星は死んではいけないので、マスターからの魔力供給が無くても現界できる。

保有スキル

カリスマ
絆：EX

遊星が大切にしている人と人の繋がり。

困難な状況、強敵との戦い、それらに対して遊星を中心とした仲間達の絆を一つにすることで、打ち破ることができる。

また、戦いにおける指揮、多くの人を引きつける統率、戦う者の力を高める士気の力が含まれており、最早ギルガメッシュの魔力・呪いを超えた究極のスキルとも言える。

赤き竜の加護：A+

神の化身、赤き竜の加護によって遊星に対するA以下の魔法はキャンセル。

闇の力または世界に干渉する力を、近くに居る人物と一緒に結界で完全に防ぐことができる。

また、遊星が望めば赤き竜の力の一部をその身に宿すことができる。

宝具

デュエルディスク
決闘盤

ランク：？

カード
絵札に込められた魔物を召喚、又は魔法・畏を発動する事ができる。決闘盤に埋め込まれた10個の宝玉に魔力を注ぎ込むことで立体映

像を現実に実体化する事が出来る。
魔物を破壊されると遊星の命にダメージを与えられ、ゼロになると命が尽きて死亡する。
ライフポイント

デッキ

ランク：E〜A+++

遊星の決闘者の魂とも言える絵札の束。
魔物、魔法、罫の力が込められており、それぞれの力の強さが異なる。

決闘盤にセットして使うことで真の力を発揮する。

戦法。

決闘盤の基本的な戦い方はスタンディング・デュエル、またはライディング・デュエルに乗っ取った戦い方である。

ただし、ライフポイントは8000で、遊星の召喚した攻撃表示のモンスターが破壊されたときにその攻撃力分のダメージをライフポイントに与え、守備表示で破壊された場合はダメージが発生しない。また、他の魔法や宝具の力によって、遊星やモンスターに何らかの影響を与えて、デュエルに干渉する場合がある。

第1話 運命の英霊召喚（前書き）

遂に投稿できました！

F a t e 5 D ' s !

第1話 運命の英霊召喚

ネオ童実野シティの未来をかけたゾーンとの戦いに勝利した遊星。

遊星はネオ童実野シティに落下する神の居城『アーク・クレイドル』のモーメントに自らのD・ホイールを衝突させるために向かった。

しかし、ゾーンが身代わりとなり、遊星をモーメントから離すために投げ飛ばした。

「あなたには未来がある。あなたは生きなければならない！」

「ゾーン！ ゾーン！！」

投げ飛ばされた遊星はゾーンの気持ちを無駄にしないために崩壊するアーク・クレイドルから脱出を試みる。

だが……。

「くっ！ うわああああああああっ！！」

アーク・クレイドルの崩壊に巻き込まれ、遊星は異次元に飛ばされてしまう。

何も無い無限に広がる異次元に飛ばされた遊星は動くこともできずにいた。

(俺は……このまま死ぬのか?)

その時。

汝の身は我が下に。

(女の子の声……?)

突然、遊星の頭に高い声が響いた。

我が命運は汝の剣に。

(誰の声なんだ……?)

すると、遊星とD・ホイールが白い光に包まれていく。

聖杯の寄るべに従い。

(君が俺を呼んでいるのか……?)

この意、この理に従うなら応えよ。

(わかった……応えよう……)

そして、遊星とD・ホイールは完全に光に包まれ、異次元から消えた。

そして、ネオ童実野シティとは異なる世界にある冬木市の洋館で黒髪の可愛らしい少女が魔法陣を作り出して呪文を唱えていた。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　！」

ドオオオオオオン！！！！

「居間の方！？」

少女は今居た部屋を飛び出し、階段を駆け下りて居間のドアを開けた。

「……………はい？」

居間には壊れた家具の上に男が倒れていた。

「ちよ、ちよつと、大丈夫！？」

少女はその男　　遊星に駆けよる。

「ねえ、あんた、私の『サーヴァント』でしょ？ 起きなさいってば！」

少女は遊星の体を激しく揺らすのが、遊星は起きない。

「もう……何なのよおおおおーっ！ー！」

少女は頭を抱えて叫んだ。

翌朝、遊星は意識を取り戻して目を覚ました。

ベッドに横たわっており、そのままゆっくりと起き上がった。

「ここは……？」

「やっと起きたわね。まったく、世話が焼けるサーヴァントね」

朝食を持ってきた少女がため息顔に言う。

「君は誰だ？」

「私？ 私は遠坂凜。あなたのマスターよ、サーヴァントさん」

「マスター？ サーヴァント？ 一体何のことだ？」

遊星は首を傾げて頭にたくさん疑問符を浮かべる。

「え……？ まさか、あなた…… 『聖杯戦争』を知らないの？」

「聖杯戦争……？ それは何の戦いなんだ？」

遊星の返答にガクツとうなだれる凜。

「まさか、サーヴァント相手に聖杯戦争の事を教えなきゃならないなんて……」

とりあえず、遊星はベッドから降りて凜の話を聞くことにする。

「いい？ あなたは聖杯戦争のために召喚された私のサーヴァントなの。ちなみに、サーヴァントって言うのは実在した英雄の魂なのよ」

「英雄の魂……？」

（そう言えば、ゾーンが言っていたな。未来で俺が英霊と呼ばれていたと……）

「聖杯戦争には七つのクラスがあるの。セイバー、ライダー、ランサー、バーサーカー、アーチャー、キャンサー、アサシンよ。そして、七つの英霊をこのクラスに振り分けて、私達七人のマスターに召喚されるの」

「七人のマスターに、七人のサーヴァント……」

「そして、マスター同士で争い、最後に生き残った者がどんな願いでも叶えられる聖杯を手に入れられるのよ」

聖杯戦争の大まかな説明を聞き、遊星は取りあえず理解したが、腑に落ちない点がある。

「君、幾つか聞いていいか？」

「ええ、良いわよ」

「今の説明でサーヴァントは英雄の魂、つまり……死んだ人間の魂がマスターに召喚されるんだな？」

「そうよ。それがどうしたの？」

「俺はまだ死んでいないのだが……」

「は？ 死んでいない？ サーヴァントなの？」

「実は……」

遊星は凜に召喚されるまでの経緯を話した。

「えーと、つまり……あなたの世界の人類が破滅した未来の世界の生き残りである一人の未来人が、未来を救うために破滅の元凶であるあなたの住む街を消滅させようと思いました。それで、あなたは街を救うためにその未来人と戦って勝利。そして、街を消滅させる未来人が出現させた巨大な城の崩壊に巻き込まれて異次元に飛ばされた……って、一体それはどこのSF映画よお！？！？」

遊星の話を聞いた凜は叫びながらツツコミを入れる。

「全て偽りのない事実だが？」

「そんでもって、英霊召喚の儀をやっていた私の声に応えて異次元からサーヴァントとして召喚されちゃった……何で応えちゃったのよ、このバカア！！　まだクラスのあるサーヴァントの方が何倍もマシよお！！」

凜は涙目になってポカポカと遊星の胸を叩く。

「そんな事を言われても……」

「もう絶望的よ……これじゃあ聖杯戦争に勝ち抜くことが出来ないわよ……」

凜はその場に座り込んで酷く落ち込んだ。

遊星は腰を下ろして落ち込む凜に話しかける。

「聖杯戦争がどんな戦いかはわからないが、君が勝ち抜く以前に、他の魔術師に命を狙われているんだな？」

「そうよ……死ぬ気は更々無いけど、かなり危ないわよ」

「わかった。それなら、俺は君を守る」

「え？」

「サーヴァントとしてこの世界に召喚されたのなら、俺の力が君に何らかの役に立つはずだ。だから、君を命をかけても守る」

真剣な眼差しで言う遊星に凜の顔は真っ赤に染まる。

「い、良い心掛けね！　じゃあ、私を必ず守るのよ？」

「ああ、約束する」

「ところで……その『君』ってのを止めてくれない？　ちゃんと名前前で呼んでくれなきゃ嫌よ」

凜にそう言われ、遊星は一つ頷いく。

「わかった、凜」

「それから、聞くのが遅いけどあなたの名前は？」

「俺の名前は不動遊星。遊星と呼んでくれ」

「わかったわ。よろしくね、遊星」

「こちらこそ、凜」

遊星と凜は握手を交わし、新たな絆を結んだ。

マスターの凜と、サーヴァントの遊星。

このタッグが第五次聖杯戦争に大きな影響を与えることになるのだ
った。

第1話 運命の英霊召喚（後書き）

遊星は異次元から召喚されたので、聖杯から聖杯戦争の説明を聞けなかったことにしました。

次回はランサーとのバトルです！

第2話 真紅の魔槍と進化の力（前書き）

第2話はVSランサーです！

遊星がランサーのゲイ・ボルグをどう防ぐかお楽しみに！

第2話 真紅の魔槍と進化の力

異世界同士の人間である遊星と凜は聖杯戦争を勝ち抜くために新しい絆を生んだ。

「さてと……それじゃあ、遊星。学校に行くわよ」

「……ああ、そうか。凜は学生か」

一拍遅れて遊星は頷いた。

「何よ、その反応？」

「すまない、俺は学校に行ったことがなかったからな」

「……あなた、今までどんな生活を送ってきたのよ？」

後でじっくりと遊星の話を知ろうと思った凜だった。

二人は玄関に出ると、遊星はD・ホイールの存在を思い出した。

「ところで、凜。俺のD・ホイールはどこにある？」

「D・ホイール？　もしかして、これのこと？」

凜はポケットから小さな宝石のついたネックレスを出す。

「あなたが召喚された時に手に持っていたものよ」

「これが……？」

凜に手渡され、遊星が手に持つと宝石が一瞬だけ赤く光り、遊星と凜の前にD・ホイールが現れる。

「な、何よ、これ!？」

「これがD・ホイールだ」

「もしかしたら、これが遊星の『宝具』かもしれないわね」

「宝具？」

「簡単に言えば、英霊の象徴するそれぞれの武器よ」

「なるほどな。確かにこのD・ホイールは俺の象徴みたいなものだからな……ん？ 何だ、これは？」

遊星はD・ホイールに変なところを見つけ、デュエルディスクを分離させる。

「どうしてデュエルディスクに石が埋め込まれているんだ？」

デュエルディスクのライフポイントを現す部分の周りに10個の小さな石が埋め込まれていた。

「……もしかしたら」

その石を見た凜はそっとデュエルディスクに手を置いた。

「凜？」

「黙っていて」

すると、凜の手から淡い光が溢れ、10個の石にその光が吸収される。

「よし、これでオツケーね」

凜はデュエルディスクから手を離す。

「何をしたんだ？」

「魔力を補充してあげたのよ」

「魔力を補充？」

「それは魔力を吸収する石よ。どうやらその宝具は吸収した魔力を使ってその力を発揮するタイプね」

「そうなのか……」

「まあ、その宝具がどんな力なのかは後で見せてもらおうとして、私は早く学校に行かなきゃね」

「凜。良かったらD・ホイールで送ろうか？」

遊星はD・ホイールからヘルメットを二つ用意する。

「あら？ それは素敵ね。よろしく頼むわ」

「ああ」

遊星は凜にヘルメットを被せ、D・ホイールのエンジンをかける。

小気味の良い何時も通りのエンジン音が鳴り、遊星は満足そうに頷く。

遊星もヘルメットを被ってD・ホイールに乗り、凜を後ろに乗せる。

「それじゃあ、道案内するから安全運転で頼むわよ」

「ああ。任せてくれ」

遊星はアクセルを踏み、D・ホイールを走らせる。

数分後には凜が通う『穂群原学園』まで到着し、学園の近くで凜を下ろす。

「じゃあ、遊星。あなたは学園の周りで適当に待機していて。何かあったらすぐに呼ぶから」

「わかった」

一旦遊星と凜は別れ、凜は学園に向かう。

学園の校門に足を踏み入れた瞬間、違和感を感じた。

（これは……結界！？ 学園に展開されているわね……さっそくどこかの魔術師かサーヴァントが仕掛けてきたわね）

凜は平常心を保ちながら校舎に向かい、そのまま授業を受ける。

授業を受けている時、凜はふと遊星の事を考える。

（そう言えば、遊星って何の英雄なのかしら？ 少なくとも私達と同じ時代の人間っぽいけど……まあ、後で聞けばいいわね）

凜は頭を軽く振って授業を受ける。

放課後。

夕暮れ時、ほとんどの生徒は学園から下校し、凜は遊星と合流して屋上の結界の痕跡を調査する。

「取りあえず、この結界を何とかしなくちゃね」

凜が結界に手を加えようとした。

「何だ？ 結界を消しちまうのか？ もったいねえな」

遊星と凜が振り返ると、フェンスの上に青い装束に赤い槍を持った男が立っていた。

「槍……まさか、ランサー！？」

「なるほど、槍使いのサーヴァントか」

遊星は宝石からデュエルディスクを呼び出す。

「怪しい気配を感じたと思って来て見たら、とんだ拾い物をしたな
」！」

「凜、離れている！」

「逃がすかぁ！！！」

ランサーは凜を真っ先に狙い、赤い槍を振り下ろす。

「凜！！！！」

その時、デュエルディスクにセットされた遊星のデッキが光る。

（これは、まさか……）

遊星はデッキからカードを六枚ドロースする。

(やるしかない!)

「『スピード・ウォリアー』を召喚!」

カードを一枚、デュエルディスクに置くと凜の目の前に特殊なアーマーとローラースケートを身に着けた戦士、遊星のデッキの切り込み役のスピード・ウォリアーが現れる。

「えっ!?!」

「な、何だあ!?!」

「スピード・ウォリアーで攻撃! ソニック・エッジ!」

ローラースケートで走った後に高く飛んで、開脚蹴りをランサーに喰らわす。

「ぐあっ!?!」

スピード・ウォリアーの攻撃を喰らったランサーはフェンスに激突する。

「大丈夫か、凜!」

「ええ、大丈夫よ。それよりも……」

凜は自分を助けたスピード・ウォリアーに驚いている。

「どうやら凜が魔力を補充してくれたお陰でカードの力を実体化することが出来るようになったらしい」

「カードの力を実体化？」

「ああ。これなら他のサーヴァントと対等に渡り合えるかもしれない。俺はカードを一枚伏せる！」

遊星は魔法・罨ゾーンにカードを一枚伏せる。

フェンスに蹴り飛ばされたランサーは起き上がり、槍を構え直す。

「やるじゃねえか！ 魔物を召喚するなんてな。てめえのクラスを聞かせてもらおうか！」

ランサーは遊星を認めてクラスを聞いた。

「俺のクラス？ すまないが、それは知らない」

「はあ！？ クラスが分からないサーヴァントなんているか！！」

「本当に知らないんだ。ただ、強いて言うなら……」

遊星はデュエルディスクを自分の腕の前に持って行きながら構え、威風堂々とした態度で言う。

「俺は決闘者。デュエリストだ！！」

「決闘者、デュエリスト……なかなか面白い奴だな。気に入ったぜ

！ それなら、俺様の本気で貴様を討つ！！」

ランサーの殺気が一気に膨れ上がる。

（何か……来る！）

遊星はデュエルディスクをぐつと前に構え直す。

ランサーの持つ槍に魔力と殺気が収束される。

（まさか、あの槍は！？）

凜は驚愕し、叫んだ。

「遊星、避けなさい！」

「その心臓、貰い受ける　！」

ランサーは力を溜めた槍を右手に持ち、投げるために後ろへ構える。

「ゲイ　」

そして、ランサーは全力で槍を遊星に向かって投げる。

「ボルグ……！！」

ランサーから放たれたのは、宝具『ゲイ・ボルグ（刺し穿つ死棘の槍）』。

それは、因果逆転の呪いによって、確実に相手の心臓を命中させる

真紅の魔槍である。

遊星の心臓を狙う真紅の魔槍。

だが、遊星はそれよりも早くデュエルディスクのスイッチを押していた。

「畏発動！ 『くず鉄のかかし』！！」

伏せていたカードがオープンし、中からくず鉄で作られた案山子^{かかし}が現れる。

ガキーン！！

夜の学校に金属がぶつかり合うような音が広がる。

「「なっ！？」」

ランサーだけでなく、凜も目を疑って驚いた。

狙った相手の心臓を穿つゲイ・ボルグがくず鉄のかかしによって防がれている。

そして、くず鉄のかかしに防がれたゲイ・ボルグはランサーの手に戻る。

「ば、馬鹿な……俺様必殺のゲイ・ボルグがあんな案山子に……」

「畏カード、くず鉄のかかしは相手の攻撃を一度だけ無効に出来る」

「無効だと？ 因果をねじ曲げる呪いを無効にしたと言っのか！？」

「まあ、そんな所だな。そして、このカードは再びセットされる」「
くず鉄のかかしのカードが閉じて伏せられる。

「さて、次は俺の番だ。俺のターン！！」

デッキトップから引いたカードを見て遊星はニツと笑みを浮かべる。

「行くぜ……俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

スピード・ウォリアーの隣に召喚されたのは、遊星が最も愛用しているチューナーモンスター。

「行くぞ！ レベル2のスピード・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！！」

ジャンク・シンクロンは右腰のレバーを引き、背中エンジンを動かす。

ジャンク・シンクロンは三つの星から輪となり、スピード・ウォリアーがその輪に飛び込む。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！」

スピード・ウォリアーが二つの星となり、光の柱が現れる。

「シンクロ召喚！ 出でよ、『ジャンク・ウォリアー』！！」

光の中から現れたのは、藍色を基調として屑鉄から生まれた戦士。遊星と共に数多の強敵と戦い続けたエースモンスターである。

「シ、シンクロ召喚……?」

「な、何なんだその魔物は!？」

「シンクロ召喚は俺達の進化と絆の証だ! ジャンク・ウォリアーでランサーに攻撃!!」

背中のブーストを放出し、突撃しながらナックルダスターを装備した巨大な拳で攻撃する。

「スクラップ・フィスト!!」

拳に更に巨大なオーラを纏い、ランサーはゲイ・ボルグの柄で防ごうとするが、そんな物は全く通用せずにジャンク・ウォリアーに殴られ、床に叩きつけられる。

「がはっ!?!」

巨大な拳で殴られ、床に叩きつけられたランサーは相当なダメージを受ける。

「凄……」

呆然と見ていた凜は口を開いてそう呟いた。

ランサーのゲイ・ボルグを完全に防ぎ、強大な力を持ったモンスター

ーを召喚してランサーを圧倒する遊星。

（私、セイバーと契約をしたかったけど……異世界の英雄の遊星と契約できた私ってもしかして、マスターの中で一番超ラッキーだったりする！？）

凜は遊星の強さに期待や興奮で心が弾んだのだった。

第2話 真紅の魔槍と進化の力（後書き）

くず鉄のかかし、万能過ぎてごめんなさい。

こうでもしないと防げないと思ひまして……。

不快感を与えてしまったらすいません。

次回は士郎&セイバーとの出会いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9647x/>

Fate5D's

2011年10月28日14時08分発行